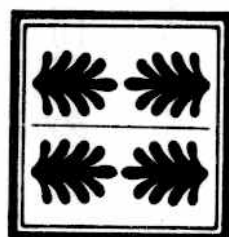


講談社文庫



講談社文庫

マラッカの海に消えた

山村美紗

昭和53年 6月15日第1刷発行

昭和53年 9月18日第3刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Misa Yamamura 1978

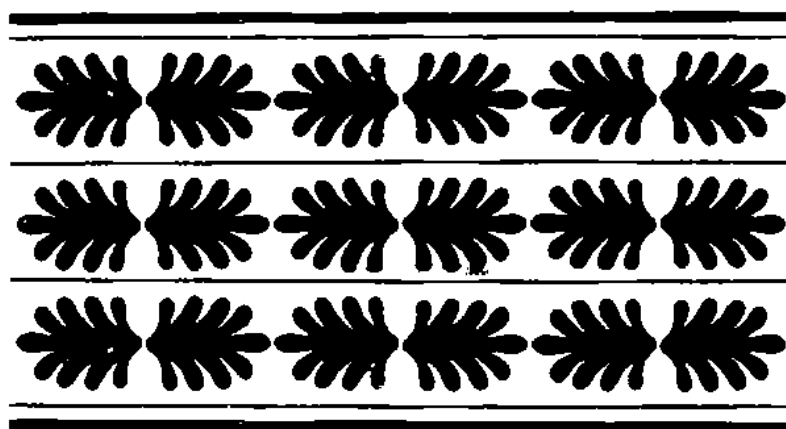
Printed in Japan

0193-361044-2253(0) 320円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

マラッカの海に消えた

山村美紗



講談社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第一章	事件への出発	七
第二章	クラブ・カリナ	二九
第三章	白石警部	四〇
第四章	ペナンへの旅	五七
第五章	ペンダントの謎	九一
第六章	イスラムの葬列	一二六
第七章	南への追跡	一四六

第八章 謎の失踪

一七五

第九章 密室の死

一九九

第十章 搭乗者名簿

二三三

第十一章 密室のトリック

二四三

第十二章 南部所長のパスポート

二五八

終章 破局への逃走

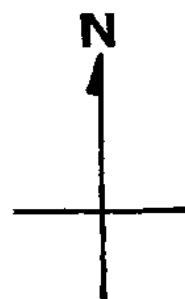
二七九

解説

大内茂男 二九四

マ
ラ
ツ
カ
の
海
に
消
え
た

ペナン島略図



第一章 事件への出発

1

その日の東京国際空港は、小雨の中に煙っていた。

混み合う国際線のロビーは、エアコンデিশョニングがしてあっても、暑いくらいだった。九月三日。まだ夏が居すわっている感じだ。

あちこちに、送る者と送られる者とかたまりが出来ている。中には、「歓送××君」などと書いた小さなノボリを持った団体もある。

そんな光景が面白いのか、そのノボリに向かって、カメラのシャッターを切っている外人客の姿も見えた。世界に冠たる「ノーキョー」とでも思ったのかも知れない。

田中亜木子は、見送りに来た会社の幹部や同僚と挨拶している夫の姿を、ぼんやりと見守っていた。ここも、大きな一団を作っている。

夫の田中一郎は、午後七時三十分発バンコク行きの日航機で、同僚の岩根と、出張所長になる南部の三人で、新しい任地のペナンへ向かうことになっていた。

二年間の単身赴任である。

仕事は、夫の属している大日本石油と、マレーシア政府で新しく作られた合併会社の技師として、海底油田の試掘である。

「二年間の奥さんとの別れは辛いだろうが、まあ、会社のため、大きくは、日本のためと思つて、我慢してくれたまえ」

と、会社の幹部に肩をたたかれて、夫の田中は、照れていた。

もし、新婚早々だったら、確かに辛かっただろうなと、亜木子は思った。肉体的にというより、精神的にである。

だが今は、二年間の別居は、かえつて、二人の間に、新鮮さをとりもどすことになりはしないかという期待が、彼女にもあったし、夫の田中にもあるようだった。

田中が、仲間の囲みから出て、亜木子の傍に来た。腕時計に眼をやってから、

「身体に気をつけろよ」

と、はじめて優しい声で言った。

「ペナンに着いて、仕事が落着いたら、手紙を書くよ。一週間に一通は必ず」

「ええ、私も」

と言つてから、亜木子は心の中で、人からみれば、まるで愛しあっている恋人同士の会話に聞こえるかもしれない、と苦笑した。

そして、夫は、一週間に一通と約束したら、書くことがなくても、苦心さんたん惨憺して、きっと何か書いて寄越すだろうと思つた。彼にはそんな律義なというより堅苦しいところがあった。

「もう、行かなきゃあ」

と、田中が、また、時計に眼をやった。午後七時三十分まで、あと三十分。間もなく、ゲートインが始まるだろう。マイクが、日航713便バンコク行きにお乗りの方は、ゲート3を通過して、832番のバスにご乗車下さいとインフォメーションしている。

「あの……ありがとう」

と、亜木子が言った。

「何だい？ 改まって？」

「赤坂のマンションのことよ。わがママを許して下さって、感謝してるの」

「そんなことか。僕がペナンに行っている間、あの大きな家に、君一人残しておくより、マンションにいてくれた方が安心していられるよ。ええと、新しい住所は、書いたかな？」

「手帳にお書きになったわよ。電話も」

「そうだったな。ああ、それから——」

「なに？」

「僕がいない二年間、小説を書いてみるとか言ってたね？」

「ええ」

「こんなことを言うのは、変なんだが、あんまりいい作品を書いて貰いたくない気もするね」
「どうして」

「僕のことを忘れると困るからさ」

田中は、珍しく冗談を言って笑った。

隙間風のできた夫婦にとって、この期間が危機であることが、彼にもわかっているのだろう。

そのあと、二人の間に、また沈黙が生れてしまった。亜木子は、仕方なく、離れたところにいる岩根の方に眼をやり、

「岩根さんに、きれいなお嬢さんが、見送りにいらっしやってるわね。恋人かしら」

「ああ。あの女性か」

と、夫は、会話がつながつたことに、ほっとした顔になって、

「友人の妹さんらしい。和田と言ったな。彼の友人が、マレーシアの銅山で働いているので、伝言と手みやげを頼みに来たらしい」

「日本の会社が、銅山にも出資しているの？」

「ああ。マレーシアを含めて東南アジアに、日本の資本が進出しているのは大変なものだよ。あまり進出が激しいので、経済侵略だとか、黄色いヤンキーとかいわれるんだろうが……」

そんな会話が、二人にとって、何の意味もないものであることを、亜木子も夫も気付いている。気付いていながら、黙っていることが不安なのだ。どんな話でも、会話している間は、二人の間に生れた隙間風に対する不安を忘れさせてくれそうな気がするからだろう。たとえ、それが錯覚だとしても。

彼は、また、仲間の中に引き戻され、「万歳、万歳！」の叫びが生まれた。相変わらず、夫の田中は、照れ臭さそうな顔をしている。

二つ年下だが自信満々な同僚の岩根や、胸をそらせている所長の南部と、鮮やかな対照を見せていた。

夫たち三人が、通関をすませナンバー3のゲートを通ると、亜木子たちも移動した。

夫たちがバスに乗り込むと、また、「万歳！ 万歳！」の声が上がった。

バスに乗る間際に、夫はふり返って、亜木子に手を振った。

バスは、二〇〇メートルほど離れた位置に止まっている日航のダグラスDC8^{エイト}まで、乗客を運んで行った。

送迎デッキに立つと、風が少し冷たかった。

うすくらがりの中に、ジェット機の轟音^{ごうおん}がとどろき、夜行便のライトが、アブストラクトな線を描いては、消えていった。

空港全体は、照明に照らし出されていたが、降り続く小雨と、午後七時三十分という時間のせいで、バスから乗り移る乗客の顔は、定かではない。

夫たちを乗せたDC8は、滑走路の端までゆっくり進むと、エンジンを全開して走り出した。並んだ丸窓から、夫は、こちらに向かって手を振っているのかもしれないが、それも見えな

い。
DC8は、轟音を立てて走り出すと、ふいに、鎌首をもたげるようにして、浮きあがったが、その巨体は、見る見るうちに、暗い雨雲の中に、消えていった。

あっけない出発、という感じであった。

それまで出来ていた大日本石油の社員たちの人垣も、急に崩れ、小声だが、所長の悪口なども飛び出した。

社員仲間などというのは、こんなものなのだろう。

亜木子は、南部夫人から、いっしょに車で帰宅を誘われたが、寄り道する所がありますか

ら、と断わって、一人で、タクシーを拾った。南部夫人は話好きで、悪い人ではないが、やはり、上役夫人といっしよでは気づまりである。

タクシーに落着くと、亜木子は、ほっと息をついた。夫と別れた寂しさよりも、息苦しさからの解放感の方が強かった。

亜木子と田中は、亜木子が大日本石油の部長秘書をしていた関係で知りあつて、結婚した。結婚して四年になるが、子供はまだない。

マレーシアへの出張の話を聞いた時、亜木子は、夫が、それを希望したのだと直感した。そして、別離が、離婚という形でなく、ワンクッションおいて、こういう形でやって来たことを、素直によかったと思った。

たった一人になつて、マンションで、色々考えてみたい、と思った。

二人の住む家は、東京郊外にあり、二人が結婚した時、今は亡くなった夫の父から与えられたものだったが、亜木子が一人で住むには大きすぎたし、不用心でもあった。

彼女は、夫の留守の間、その家を他人に貸し、代わりに、赤坂にマンションを借りて、好きな小説を書きたい、と田中に言った。

田中は、それで、寂しさがまぎれるのなら、とあっさり許してくれた。それが愛のためなのか、愛が薄れたためなのかはわからないが。

2

タクシーが、新橋から赤坂に入ったのは、九時に近かったが、小雨も止み、この辺りはネオン

の洪水であった。雑木林の中にある静かな郊外の家に住んでいた亜木子には、全てが珍しく眼に映り、軽い興奮を感じた。

亜木子が借りたのは、TBSテレビに近い十一階建の賃貸マンションである。2DKで、五万円だが、この辺りでは、高くも安くもない普通の値段のようだった。

赤坂第四コーポと書かれた建物に入り、エレベーターで、九階まであがる。

小さいが、二年間暮らすことになる部屋である。

簡単な調度品しか買ってなかったが、それで充分だった。六畳の部屋のまん中には、真新しい机が置かれ、その上には、これも真新しい原稿用紙がのっている。

だが、その前に、すぐ坐る気にはなれず、ベランダに出てみた。

すぐ近くに、東急ホテルのまるで衝立つたてのような巨大な建物が見えた。明りの灯ともっている部屋は、泊まり客がいるのだろう。雲の切れ目から、月が見え、夜空を飛ぶジェット機の点滅する明りが見えた。

夫の乗ったDC8は、今頃、どの辺りを飛んでいるだろう。夫も、今ごろこうして飛行機の窓から、地上を見ているだろうか、とふと思った。

いや、夫は、景色などのしむようなところはないから、ただ、じっと眼をつぶっているだろう。もしかすると、眠っているかもしれない。

いっしょに行った岩根とは、正反対の性格だった。

岩根は、きつと今頃、窓外の夜景をたのしんだり、マレーシアの地図などを出して、所長と話したりしているだろう。それとも、夫の言っていた友人との現地での再会をあれこれ考えている

かも知れない。

少し早く行きすぎて、空港ロビーに待っている間も、岩根は、マレーシアの海がきれいなことや、ペナン島は、一年中二十三度から三十度ぐらいの温度であることなど、亜木子に話してくれた。

「もったも、これは、ガイドブックで調べた受け売りですが……」

と言って、にこっと笑った。

笑うと、男には珍しく八重歯がこぼれて若々しかった。そして、

「奥さん、是非一度くらいは、見舞いに来て下さいよ」

と言った。

別に、亜木子に関心を持っているわけではなく、ぶすっと黙っている田中に代わって、亜木子に気を使っているらしかった。

夫からは、ペナンが、どこにあるのかも聞いていない。

「いっしょに行くか？」

とも、きいてくれなかった。

もちろん、いっしょに行く南部所長も、子供の学校があるとかで、単身赴任であり、岩根も独身なのだから、当然かも知れないが、「いっしょに行けるといいのに」とか、「二年は長いなア、間に一度ぐらい来てくれよ」とか言ってくれてもいいような気がした。

もし、無理にでも、いっしょに連れていってくれたら、二人の間の隙間を埋めることが出来るのではないか、とも思ったが、とうとう田中は家を出るまでなにも言わず、毎朝出勤するのと同

じょうな、淡々とした態度で出かけてしまった。

結果的にはその方が良かったのかもしれない。

二人の間の隙間風の原因は、自分の過去にあるのだと亜木子は知っていたから、自分の方からは、何も言えなかったのである。

戸を閉めて、机に向かおうとしたとき、電話がけたたましく鳴った。

まだ以前の家にいるときのくせで、あわてて立ち上がって、階下へおりて行こうとしかけてから、ここは、都心のマンションで、電話も、すぐ傍らにあるのに気がついた。

手を伸ばす前に、時計に眼をやったのは、夫のこと、まだ、バンコクに向かって飛びつづけている飛行機のことを考えたからである。最近、飛行機の事故が続いている。もしやと思い、いくらか蒼ざめた顔になって、受話器をつかんだが、聞こえてきたのは、酔った男の声だった。

「山下君に紹介されたんだが、これから、つき合ってくれない？ 十時半に、クラブ・エルで」
「え？」

「そちらは、401の86XX番だろう？」

「そうですけど」

「じゃあ、来てくれよ。十時半にクラブ・エルで待ってるよ」

相手は、勝手に、それだけ言うと、ガチャんと、電話を切ってしまった。

亜木子は、事故の電話でなくて、ほっとすると同時に、笑いがこみあげてきた。

間違い電話なのだ。

まだ、この電話は、前にここを借りていた人の名義になっている筈だと、気がついたからだ。